

芸編

天津追想
北京追想
八月六日此書より天津へ物。
京都追想
近江六景見物
十二月廿日叡山以三山
可上金月十七日八幡山参詣
可上金月十七日鞍馬貴秋参詣
早子五月廿七日伊勢参詣

特別
イ 4
3159
A12

才徳不文の文藝科生

詩経傳 三、一九、三三。

14
3159
A12

新しい宇宙發見

米國の學者が發表した

雲をつかむ様な話

「シカゴ電通二十一日發」我等の宇宙に同じき別の宇宙が存在するところが發見された旨發表された、右は六萬六千兆マイルの距離にありエドウィン・ハッブル博士はツイルソン山測候所より之を撮影し距離を測つたと言ふ

星の海より何月まで



第一章

日本初期の印刷術

古代宗教書類

第二章

十七世紀初期の縮巻

第三章

師宣一蝶光琳及其列人

第四章

藝術及び出版の中心トシテノ大阪

第五章 印象派

四條派及圓山派

1
第三十五回

融通念佛縁起

縦九分三寸

東京小森久也

大念佛の力十七代法王上人の如くを以て
これの開闢の著ししなり二十一年頃より
其の二十五ヶ年間の年月を経て完成す。所こ
西省より歸り、墨刷の上より彩色を施せり
その他名の詞は著述に著る法、親王以下
二十人の著り成り、終は上巻小巻以下六人
の著しを著く刻法精妙なり。刻字を核

入る人の名は陸所記入一の縁心なり。
服弁は之を全国に於て九州と都つ、
なりともは、少くとも七都を指し、
一とを知るべし、即ち此の文を後述の跋
に「良饒」字を融通名佛勸進此總方一
之箇國の各一卒可得賦但不限毎國一本
陸勸進之儀任所望之昨一國多本亦
可、及過都著夷之界一の跋得之と云へり。
然るにこの刻本に世に存するもの甚しき稀

あゝ吾人は新くうてこの一本に接する
を得し。巻尾又次の識語あり

2 東施融通多神經三部の

本

享和二十四年十月十日 良本

永年二何れ又せられしものなるや明か
系と雖も、この附記は摺字新色字の完
成せる年代を示すものとして略るは固
く誤るべし。天保十三年詮海なる者これを
撰津子と記す大分佛と云ふなりとて、

一部分と標刻せり。説のほうも
一帯を以て山林の有り様を
なりん。原とこの版中にも山のあま
るありと云へは同山の文句を
解せりものに依りてす。多し
所はありし

世に有る通考は蓋し山門所載
板中一帯を以て山林の有り様を
なりん。原とこの版中にも山のあま
るありと云へは同山の文句を
解せりものに依りてす。多し
所はありし

後教逸殆盡、幸我攝津正太念佛寺
珍翁一草、陰海以迄不增、在蹤、模刻
以國不朽、適有好事士、見歎曰、凡畫
卷、和而濃、板莫此為古、若然、則愈可
奇而貴、以嘆其陋拙乎

王保十子、甲辰冬
大和呂駒家、詮海謹誌

秀氏祐祥、古代板畫、

三書 十三卷 十三卷

三書 卷一 廿二卷 (十八卷)

三書 卷二 廿二卷 (十九卷)

三書 卷三 廿二卷 (四十二卷)

三書 卷四 廿二卷 (六十二卷)

三書 卷五 廿二卷 (水)

三書 卷六 廿二卷

三書 卷七 廿二卷

岸駒派 蘭高麗等より

支那派 方西國より

國華セナ等より

吾等も亦其國の子弟と成し
又執るふくおろしき分派と
なり

國華セナ等より

此等の派偏 彩も亦あり

木曾海を云々拾ふ次第

みえどのの種より

東北帝國大學本館所蔵 四葉書

何目録

平河先生遺墨

南鐐八片換小判一兩

柳子厚「河間傳」
一ノ類あり

撰我經

老子

化蝶翁

莊子

國珠經

論語

令世才

孟子

佛說過世佛分衛經

神護景雲二年十月廿八

右傳分經卷六

妙法蓮華經陀羅尼品第六

卷末。金光明最勝王經卷第四

蓋最厚一枚ハ別紙に縫ひ

こゝに

斐及曾面舅

寅年六月 旃陀

花色女 二女

蓮織阿旃陀淨土變

北車善

如

不普及四生傍其

天平寶字七年

名古^版曼陀羅ニ見ル

因明入正理論疏卷第一

此成大卷

神皇正統記乙丑閏二月廿五日

寫竟 玄昉ノ書ナリト云フ

右内実不折の教壇若振の古本

布に似たり、但し其本ノ自來也 引子

大般涅槃經卷第十四

宋版

大和別当道郡下深川尾社氏

寺經也人々云々

久安二年三月十七日

勸緣山比丘釋 永圭 謹誌

久化己巳五月

向陵真逸多賢公瑛之記

山水廣德寺

大般若 卷之五

釋淨土群疑論 六

建長二年庚戌季夏日

願主比丘 往成

往生拾因 一

寶治二年戊申仲春日

願主比丘 往成

論語 何晏集解 十摺

左中將後宗重

應永乃年八月廿五日感得之

天台任侶兼芳

貞和三年八月廿七日朋友令

陳輝畢左中將宗重

血穴寺

兼快金金具三六重

足跡の道(命の)をうかん
人おのれ(一)の縁をよる
―なるものなり経安うた
ふふふふ

のり刷色 黒毛中張り五寸

のり刷色 赤毛柔

打刷色 棕櫚布より重し五寸

など刷色 棕櫚布より重し五寸

ヘラ

かりばり

定本 三六位

板 桂、ほろつ爪、

貝素那トリウムニ。

重曹ニ。

コナラゴ院効水四。

水一〇〇。

安知必水一。

安那加一。

乳糖一。

ろこ色

○嵯峨本老女一員

住吉の杉並社風吹く下に

いすくもまのきいあふりた

まきとくのひはちもいすた墨ゆな

事の野にあききうすの事あて

高はのみきくめしうあふりた

是れをな柳桜をこきやせを

むすふの零にはこきやせを

桜ちるあふりたはきむりて

あひめはなをきくあふりた

たいて

を見えさうらう。そのはせあふり

○大化以前

十七箇條憲法

勝鬘經疏

法隆寺、新田、藥師像光背の銘

中宮寺、天壽國曼荼羅銘

○奈良朝

古事記

日本書紀

諸國、風土記、宣命

○平安朝

延喜式

祝詞

奈良良朝

懷風藻 秦

萬葉集

三教指歸

文鏡秘府論

性靈集

凌雲集

文華秀靈集

嵯峨帝勅撰

經國集

竹取

伊勢

延喜時代

古今集

勅撰和歌集 嵯峨天皇

和歌四式

和歌式

大堰川行幸の歌々序

土佐日記

後撰集

宇津保物語

落窪物語

後氏全盛時代

和漢朗詠集

白河院御製

枕草紙

源語

四十回物語 源氏物語 十帖 源氏物語 十帖 源氏物語 十帖

紫式部日記

和歌式部日記

狹衣

濱松中納言

院政時代

後三條天皇の治より
隆盛天皇の治まで

星俊俊長俊成西行

○中世

新羅より
恒川一統まで

一新古今時代

八五〇
八九〇

四十五

二鎌倉時代

一八九〇
一九九〇

百十

三南北朝時代

一九九〇
二〇六〇

七十

四室町時代

二〇六〇
三六〇

二十

戦国時代
徳川時代

金葉集より山手歌合まで

歌の部門まで

神皇正統記

増鏡

平家

左平記

風月水ふき物

椿葉記

義経記

曾我物語

錄入天雙紙

櫻集

萬葉集

二十卷

橘諸兄

抄

二十卷

仙覺律師

詞林末葉

十卷

東門由阿

名不枕詞故可亦注寸

拾穗抄

三卷

季以

代匠記

廿二卷

下河邊長高
其冲

童蒙抄

八卷

北河田春滿

選要抄

廿卷

俊道惠岳

旁注

廿卷

同上

略解

七卷

橘多隆

佳詞

二

長歌真章

古今義

新撰萬葉集二卷 葛城

古今

醍醐帝延喜五年

後撰

三代集六卷

拾遺

後拾遺

金葉

詞苑

千載

新古今

八代集抄百卷 今略

新勅撰

續後撰

續古今

續拾遺

新後撰

玉葉

續千載

續後拾遺

風雅

新千載

新拾遺

新後拾遺

新續古今

二十一代集分類 五十卷

古今和歌集 六卷 宇祇守五
古歌集

古今隱秘抄 六卷

古今雅抄 廿卷 飛鳥井八雲
集雅

古今延五記 廿一卷 竟惠信原

古今序註 十卷 了譽上人

古今餘材抄 三十卷 契沖

古今土聽 廿卷 玄圓傳記

古今通 廿卷 五井純禎

古今鄙言 六卷 尾崎雅高

古今遠鏡 六卷 中務官長

後撰和歌集 二十卷

宇祇守五古歌集 天皇ノ天曆五年

のち魚屋

一ツク

ニブリ

ニキリ

四ダリ

五カレン

六ロシ

七サイナ

ハバンドウ

九キウフ

十ソク丸

十二ツル

十三トス

〇 灰の中五瓦焼る膏を此瓦

を好く混ぜて撒布

〇 ても是、おろし、切、き、ひ

ち、ふ、ころす、

目錄

一指輪

其個

一末廣

其對

一勝男武士

其基

一妻留女

其

一子生婦

其

一志良賀

其

一家内長多留

其号

左辭出而受納修也

年月日

家族書

親族書並親戚書



山、山祇

海、綿津見

火、軻遇突智

水、速秋津姬

木、句々迺馳

土、埴安

雨、高靈龍

雷、大雷

風、級長戸邊

五穀、歲神

平安朝、千四百五十四年の平安奠都

以来、お朝が總追捕使とあり、
即ち千八百四十六年おびを指して平
安報とす。大数、おびを指して平
安報とす。千八百五十年、
おびを指して平

日文

天名地鎮

秀真

ササ 菩薩

ソノ 声聞

ヨヨ 縁覺

トト 懺悔

土大 地獄

骨骨 髑髏

羊石 羯磨

○申年生れの偉人

芭蕉、許六、世無村、

平田篤胤、

渥丹

容美

公主

天子女

俟々

容貌大也

佹備

不媚也

佹々

遑遽貌

林檎

驚貌

佹鬼

佹然

安然不疑也

倜傻

愚貌

倜傻

行相及也

儵囊

亂貌

傒々

醉舞貌

僂 僂 健 貞

兩邊僂 彼此誑惑

僂 無憚也 僂 行 貞

僂 々 呻吟也

僂 狡 輒迫也

僂 々 舞 貞

僂 然

僂 僂 衣服婆娑 貞

僂 然 逞 貞

僂 僂 日旁氣

僂 僂 不舒展 貞

僂 僂 質物直

僂 然 微見也、彷彿 貞

僂 卓特也、同俊

僂 健 肥 貞

僂 僂 短醜貌

僂 慧利、疾也

僂 豪強 貞

僂 美也

僂 々 低 貞

僂 々 孤狸 貞

僂 僂 形貌惡、又謂勇悍曰僂

僂 孔墨之弟子以仁義教導于世不免于僂其才不欲為也、又不免僂貌

僂侗 未成器也

僂侗 頭向前也

僂儻 仙人也

矐々 銳意也

矐 重覆也

完 目深也

顛 高遠也

決滌 陳相著也

泐忍 惡酒也

剗流 回轉也

勦 負物也

勦 居強也

枋 材十人也。功大也

車 棄舊器名

華

屈 山左右有省曰屈

屈 嶺也

屈 側建切音黠

壘塊 胃中不正也。晉阮籍曰月

妓女 宜草別名

嬌 含怒也。又豐豔貌

幡幡 旗幟貌。又失威儀貌

掩掩 日無光也

棧齒 高峻也

殒

毒之反也同夭

沆沆

流行貞

沆溶

水流澗谷中也

沛艾

姿容俊偉貞

滯沛

奔揚貞

濩濩

衆波聲

渾渭

不安貞

溯游

順流而下也

決滂

曉色不明貌

潺湲

流水貞一曰水流貌

ふりあふる 鋤のきやもふゆら

秋風

香を採ふ 採ふ 採ふ 採ふ 採ふ

ちりちりちりちりちりちり

こころのやうなうらな

おもしろい 柳のうらな

定本 柳のうらな

夢うた

拾ふ ちりちりちりちりちりちり

能代 柳のうらな

○浮屠山姥の歌

心う山姥といふ名をつけて
そわれしものうきよき世に

○君臣歌

きみまうらおやこいもせにうと
おれぬるけりたうへすき
けるあめつちさかゆふをちひそ
あゆめろなほ

右細井彦海の作歌、蜀山の
三十輜にあり

病床十首

天章
慨歌

あつてもはる四十す

あやまらぬのしるふて

あふよりて生れあふし

あすすゝはの心のあふし

死ぬけの苦みなくばなほ

白雲果て我れあふ

悪き奴等永生さきよき

永く苦み長く聞ふ

恥しうあふのふかうき

いふ事もれくて過す

あふしあふのふかうき

いふはくうらなふの
いふはくうらなふの
我をにくし人あふりふ
ありて死を恐るる
死をちぶといつれか幸か
常々美色せし人早過さそ
食を瘡の蝨鬼さあられ
山中は水の儼ふいりて
掬ひてのらん甚清水哉

○

世をわづかあふるは
世をわづかあふるは
おちる流る二つは川乃
志士の流の川は深き
下流の立ちて汲む人のなき
あすはくうらなふ
あすはくうらなふ

○こころに歌 おもひに

思ひと恋と母のせうめ
思ひはしづんで恋いうく

○法身有限事無常と云ふ

文の心と

いつおそはあけぬれあつといと
なやむみはつやうありこゝろは
つみせん

○素樸木所安を清右衛門

大石良雄遊興せし歌 ふいふし
おもひに

出羽ノ雄勝、隆奥ノ桃生風

俗清し ふいふし中巻
おもひに

○古錢

乾元重寶

得一元寶

皇祐元寶

錯刀 おもひに
おもひに

解 おもひに
おもひに

醒 おもひに
おもひに

燕尾服 おもひに
おもひに

有内也ノ風何文選ノ注ニ三籟
集ヲ知ラヌ様子

おつりにてさうりさり入お花王
松似に男婆まぐり丹前
色男十人三文の巻末

表札ノ疑は津野政村
と猿山流るる

人をつゝふも甚をつゝふやの風
俗死なむよむすいふ常の世に
五人娘のおうつが物述懐

○蠅を家内に入れぬ事を

五月五日午の時に儀方此字
を書けて門戸に逆に押すべし

○思ふ事かなし符

一尸田鬼急如律令

此符枕の下におくべし

○口舌事に立る符

天咒上器戸ル急如律令

○一切の口舌をよける符

尸曰鬼尸鬼急如律令

○符字造日善惡之事

一丙午辰。丁酉。戊子寅辰

申午。

以上

一庚寅。壬子寅酉。癸卯酉。

以上大吉日

一甲寅午辰戊子。乙巳丑未酉。

辛。右惡

火星(額)土星(鼻)水星(口)

木星(左耳)金星(右耳)

羅喉(左眉)計都(右眉)

太陽(左眼)太陰(右眼)

○北岳(頤)豐潤富主老
榮尖削缺陷末主無成
○髮際多者貧窮
○無髭髮小亭相亦無
○禿髮之健兒

明治三十一年

○天津追想

大智丸五月十八日着

角南氏と大道教歩飲今食

今食

中村氏と鼓樓と上り煙臺

眺る。

予が取りし天津鼓樓の大仙靈

籤に曰く

天津鼓樓 第二十五籤 上吉

人望高樓水望低時來忽遇上天梯

須知高處多危險穩步平康路不迷

謀事成病即愈求財有婚姻宜走失不見

胎生子官遠遷

出門有所圖 勝如家裡坐
雖無上天梯 一步高一步

獨りて天津郊外よりさ
土饅頭の多くありしを食し
る事あり

井村氏と天津西はづれよりさ
籐のスクギを買ひし事あり
中村氏と信別より來れり
醫師の許を訪ひし事あり
りそこより一茶の饅頭を食
たり

天津に到着ししは五月廿
にて廿九日に堀田氏と共に
北京を行く

北京追想

途中汽車より遠く望むと
湖海ありに湖海のかさむる

北京城近くありて其のあり
る事の多き所なりしを思ふ
楊馬車より萬姓園を
見る

聖と天壇外より見る

あり
 中村氏と天壇と見柏樹多
 堀内氏と鼓樓近くあり
 寺あり
 本里氏と冷動所あり
 中村氏と芝あり
 中村氏と料理店あり
 都室と役者の歌あり
 矢内氏と藝者あり
 尾あり
 恩棋と支那語と

江戸中村氏

子
 佐賀の人 新々
 尾州の人 醫師
 水戸の人 巡査
 縣雨時と来り
 橋樹大あり
 石敢當
 天壇の大理石 あら
 牛肉羊肉一斤 廿二銭
 豚肉 廿
 玉子 一個 十銭
 此は能く習字と小説を

○京都後進想

明治四十年十一月十七日 高碓
梅庵行

朝露あけの文とて公取、もとこ
 へといふ處の端と出づる中
 余は幸ふまはるのあしを雲ふ
 べくてといふも、そくに付、
 むさゝ二人の親をいふ急とて
 妙なり、いふ言をなすべく
 又、さういふ言をいふ、いふ
 人、力事のなりて、いふ、いふ
 ず、高野の、いふ、いふ、いふ、

の尻より梅の尻よりもさる
夢 宇崎のさあがり再び
車に乗る廣海池を廻り
て太秦の廣海池を廻る 花
園に出る 牡丹の着ききき
を幸町より来る 玉崎より
夕方帰る 文はまき物より

小幡下馬屋

明治二十年十二月十日
健之と直江と桑と
十日(陰曆十月十七日)夜
十時色どやをあらわりの
とる 外風を女三人浴す
とる

山崎六角也
柳山 夢改山
月下柳風社話づ
大伴良をあらわりの
青壁土、大津路の糸屋、
琵琶湖附近の通切る釣

の終
十日

在るをあらうて四書類
近き足付く

柳を似る樹、中々、

杉材一本

紺色より黄より汽色まで

石山よりむく(高き海に)

石場の段布を

築けが京深田の柳。

新木林の中の前庭

石山を石、月をさす

市天、海氏の問

廿五菩薩、校実、

多宝塔

立本観音あす丁とすそ

りふす

雨少し降る二王門より

心む

石山より形する庭の

むく(朱の海に)

柳を油を

漆田の柳けと十九、

浅く、堤取るを多くする

船中より南
岸崎より南へ一は一所以
卒をさして杉をく
るるに膳両亭又和雨と
と福一又かきととと
昨宵大はくしわくかの
付きと鳥肉をくし今朝
蛇(膳田炊とふ)のけを
くし今朝雨ととと
の巻付き、あちのさし
ぎんげ、麴の玉とと、小
老、いさバの巻付きを
くす

松のぬれいろ あけのきり
枯き やれ船
夜崎より三井寺まで
汽船
三井の熱心、村や松
金串、舟屋の障
度寺 羊
三井のあちととと雨と
茶屋 舟屋の力餅
下山大はくしわく
臨水のぬれととと
午は甲時次舟屋の巻

明治四十七年戊申十二月
二十日(曜日)比叡山に登
大原親光院に詣りしと
かきむと時の飯をくふ
氏大改よりきりとかきふ
在、人より此所の縁より
沿つて進む、山はなすの平
八茶屋の前より、即ち
入る、親しく此人前と飯
をくふ、大よあつていふ
親しくの飯、大に白味、
そすナメ草をくふ。

寺の下りむる浄土院大
徳寺と云ね根木す
きうらうらうらとあり且
つらう山中を杉七松并
敷の力餅をくふ年故
所山を下りて其之の境を
是より近にの湖水を下
瞰す絶景あり不記を
弁天社と云ふ
きみ(弁天の)ありうらうら
湖水をのぞくは遠く湖
田の松大津の駒を見渡

崎の杉は眼下よりうら
うらうらうら白河は出て
河内を流るるやうき
白河は名水園をめぐり
かたにふにむくも石村
をきくす此山石い

明治三十四年十一月十日
馬山に晴ふ冬に活花
如く水もぬる氣を陰
晴定まること京都のちの
殊うぬるは似ず今年持て
もつてぬるもの思ふこと
そくそく 晴るる 馬山
の處を去て二条より電車
を七條より行く所を馬
山は二三条に人押し
おされつゝ難き事あり
永路の暢快じきし

山崎おむね汽車も乗らん
とあれえきりと切符を買ふ
もの切符取ぬるもの
ものきりりおむね乗ふて
切符を買ひ汽車の
汽車あり 切符も
にうらにいて大いなる川
を渡る大堰川の末桂川が
らし
汽車山崎おむねの優
二回目を竹園より入るを
うものあり其の大に御来

と書きて一、あ、かく
長さ七寸位のものをしり
おもしろい巨指の池より取
りしものなりし。

さの左方には乞合あきこ
みなり、幻くまの丁はし
淀川の堤より出つ、後、船を
おろし、舟に上りて、人あ
きとひ、あけや、数人、と
い、堂二人、と、割すれとも甲
斐れく、ま、あ、船頭の一
人、指をとり、例ふれとも、後

ろより、おもしろ、我、其、指
を、押し、おもしろ、と、なる、川、を
中央、河より、其、ま、え
は、一、鉄、と、ある、二、個、お、の
は、一、指、あり、と、俵、に、一、鉄、五
石、なり、と、指、す、もの、ひ
き、も、切、り、あ、り、大、阪、の、ま、り
ま、り、もの、ま、り、ま、り、もの、
皆、この、指、と、ある、事、
る、れ、が、一、つ、一、つ、ある、れ、も
其、十、乃、と、ある、ま、り、もの、
あ、り、と、ま、り、あ、り、と、ま、り、

ある中より強り合ふ
のありぬより見ゆる山
りと寺の跡なり三つ四つ
見えぬ山よりある
るかくあれこそ田舎
らとみえつり
人皆さあつぬ方と
むねをば此方のお
由あるふけを彼方の
跡よりさしりこそ後
りあるふけを様い
ささい左の曲り堤の

よより八幡をひす
りより八幡をひす
行くは水は川の川
ある十一二の山
三十人行軍のさ
るなり
堤より二三丁
八幡のや跡あり
前一丁も行ふ
ある二の山あり
ればさ急る
ありさより
ありさより

懐いめをこゝろに
又矢羽を造りてしもの竹の
心枝よく造りてし琴を
造りての孝庵より屋敷
をもちむき下れを
之うは通ひざりしハ
帰りの所よあやまこの香具
師ありんさる左方へ笛
太鼓の音あり
所の市街何処と云ふも
知るものなり
物政哲らくにしんね花

電燈の右に山と云ふ所
 あり
 又十五丁の堤をめぐり
 ぶらぶらと歩くと
 又之に山と云ふ所あり
 製鉄の煙が立ち上り
 又電燈の影がみえる
 曲る電燈は皆一様の曲
 物をとりて鉄道を
 走る一層の通る人の
 水をいぶらうと難ぜし
 一人のあやうな彼等は

組織ありて一様の
巻物を有せり

山崎 鶴の糸れば又巻
最廣正一 鶴の七條
り似たり 菱車を付つ
こと一時百あり車にの
らん 一々衆におさ
れり 古来のし 鶴をはき
けつし 羽の下りずり
條を工夫と手招きして
雨りもいひたり
午は甲午世に似たり

着く市井のなすの鶴
もつて車にのりての矢を
もつてのなすの鶴の
矢は前より矢はすし 時へ
幅字よりいひまを
うへておる 矢はすし 前の
ものと矢はすし 矢はすし
替の如し 矢は羽あり
鶴の如し 一月た地

明治四十七年十一月一日 駒馬炎
船参詣

却て舟中宮崎を立廻る塔
の段より後解舟氏と云ふ
舟をこゝれつぬを海橋と
わたり行く舟をききしに
清洲より池より一里の春
春すゝ池あり池より五
里ありて山路より一里の羅
州の池より一里ありて松山
一里ありて左名の松林より一里あり
松林より一里ありて海にさ

い石よりなりて前より一里あり
より来る牛馬の坂より一里あり
十一里ありて大門にありて
仁王門は焼失して母と云
ふの塔より一里ありて古く
白き仁王塔びと云ふりそ
より一里ありて石坂より一里あり
由木神社より一里ありて
義経の塔より一里ありて
海より一里ありて海にあり
ふといふ海にありて
ゆめやありてありてありてあり

海の音の歌を載せ
るに詠歌と立れり記す
東の如く新するは杉樹直
くともありされど忠像
のやうにて古事とあり
かてほしかに新して
中世は可もなく石の
とき時ふまゝなり
の院にもふと慶王尊教
の杉といふなり又義
経背くくむとあり
義経の古法物古場と

ふ山より少しくあり
かゝるうゑ石を載せ
あり周囲は杉樹直
なりある牛鹿丸と記す
さして其の古石の上と
ちこちとはぬと記す
杉樹の梢よりあり
むらと記す
すさむに記す
美しき急の下り
谷川の杉とあり
貴船神社の古物古場

貴が来詣日 おの 院 云
丁とさして一里をいへ行
くさしとつゝいをいへ
そ前の茶をいへ休む物致
は馬流の池より出てすし
上加成を話からぬ川の
堤よりさして堤のあはれ
それより言はれり物。
○新つゝをいへか
市井前の茶をいへ屋
は加成をいへまういへ
おの院は絶頂といへ

くはあさんきつて向くおの
院まは ひ 下 と す と ぬ 笑
話よりいへ
○貴船よりいへ坂をいへ
おの院よりいへ
○貴船の村はあはれいへ
山あり

丁未(明治四十年)伊勢参
事追想

五月廿六日

大船手前汽車中より金
親婦人よりある
少ゆきと送り金御中
より

泉陵苑を過る
西へ汽車をとり福部
下車を降りて
二見浦の向ふ海上に
海蔵島ありぬき
をこし二見一泊伊勢の

付寄順會よりある
同室聖祖より海へ物
難けり朝磯山より
下村安良より送り下村
は屋敷大木の西へるを
より孫女と共に伊勢参
事の途よりあり朝磯
金剛寺より寶物より
るものなり村中を過
り山大ゆき参り下村
より又あり山田より汽車
より下村よりあり



